

## Satellite2004 会議出席報告

本誌 植田 剛夫



コンベンションセンターのSatellite2004入り口

### —Satellite2004 とは

衛星通信関連の国際会議で世界最大の Satellite2004 が今年も 3 月 2 日から 5 日までワシントンで開催され、飯田会長のご配慮により、AIAA-JFSC の立場で参加することができたのでご報告申し上げます。

この会議は ICSSC と違ってビジネス面の討議を中心とするものだが、世界の衛星オペレータ、衛星・ロケットメーカー、打ち上げ事業者、サービスプロバイダのトップはじめ多数の幹部、ジャーナリスト、アナリスト、投資銀行、保険事業者などが一堂に会することで有名で、その年の衛星通信ビジネスの状況をうらなうものとして注目される会議である。

会場のワシントン・コンベンションセンターは、昨年秋に従来の建物から 1 ブロックほどのところに新屋が完成し、初めての新会場での開催となったが、知らずに旧屋へ行ってしまい不安な思いをした向きも少なからずいたようだ。

ワシントンの街は週初めから急に春めいて連日 17 度から 20 度、最終日など 25 度にまで上がり、半袖で街を歩く人も多く見られた。例年より 2 ヶ月早いという暖かさだった。



新ワシントンコンベンションセンター

### —これからの衛星通信を支えるアプリケーションは？

公式会議初日の朝には、毎年呼び物の世界 6 大衛星オペレータ CEO (SES/Bausch 氏, Eutelsat/Beretta 氏, New Skies/Goldberg 氏, Intelsat/Kullman 氏, Loral/Schwartz 氏, PanAmSat/Wright 氏) 勢ぞろいによるオープニングセッションがあり、会場の Ball Room 一杯の人が集まった。

史上最悪の業界不況で氣勢のあがらなかった昨年の会議に比べ、2003 年の衛星新規発注数は 2002 年の僅か 3 個から 17 個と急増したこともあって、トップの話には会場からの期待が伺える。

司会を務める主催者側の最大の関心事は Consolidation (合併) であって、今年もそこから話が始まった。各 CEO はいずれも、合併によって現在のトランスポンダ供給過剰の状況(稼働率約 60%)が改善されるわけでないとして否定的。Intelsat の Loral 北米衛星の買収はあるが、当面これ以上の合併に対する意欲は見せなかった。

今後の有望な分野として、4, 5 年前の会議では合言葉のようだったのが衛星ブロードバンドだった。今回はこれに加え、米国での HDTV の伝送が有力なビジネスになる可能性として強調されたほか、欧州でのインタラクティブ DBS、車や航空機むけモバイルブロードバンドなどが語られ、単なる回線容量の提供だけでなく利用者に付加価値サービスを提供することが重要との指摘もされた。ただ、いずれも、会場の聴衆の期待にこたえる強い印象を与えるところまでは、やや達しなかったようだ。

この「呼び物」、いつ来ても壇上の顔ぶれが全く変わらず、毎度同じような話を聞かせるあたりは、この業界が安定しているしるし、と見るべきなのか、それとも業界の停滞の一原因が変わらぬ顔ぶれにあると見るべきなのか。筆者はやや後者の感想を持った。

何年か前の LEO 全滅期にも、「LEO は自分達とは無関係。FSS(固定衛星通信サービス)は超高利益を上げており、世界でもっとも強い産業だ」と胸を張っていたが、今回も「弱いのはラテンアメリカとアジア太平洋で、北米、欧州は強い」「トラポンの供給過剰は軌道位置、周波数、アプリケーションを正しく使わぬ者のせい」などの発言もあり、前向きに好業績を目指す姿勢とは少し違う感じもあった。会場の日本人参加者の間からは「Chapter11 の会社のトップが平気で出てきて話すあたりは、我々のセンスではちょっとね」という声も聞かれた。

きわめて技術オリエンテッドな事業である衛星通信ビジネスにあっては、トップから、将来への展望にからめてもっと技術開発への要求や展望めいたことが述べられぬかとの期待がされる。唯一 Loral

の Schwartz 氏だけが、新アプリケーションの開拓を先導すべきものは技術開発であるという所見を、具体的にでないにせよ、はっきり述べていたのが印象的ではあった。

初日午後の実務レベルのセッションでは、HDTV が衛星の高収益源となる可能性について、TelAstra 社の高名なアナリスト Rusch 氏は、現在標準トラポン 1 本あたりHDTVは高々2～3chで、4chへ向けた技術開発はされているが、さらに圧縮、変調やコーディング技術の点で大きな飛躍が必要。アナログからデジタルへ移行のときにも、圧縮技術等の進歩によって1トラポン当り6chも入るようになったことからFSSがあれだけ栄えたのであり、現在の技術レベルのままHDTVに期待するのはどうかとの議論を展開、筆者には共感するところがあった。

なお、このセッションに限らずあちこちで、米国の XM-Radio, Silius2 社によるモバイル放送は成功とされて明るい話題になっていた。日本でのサービス開始が近く、音声放送だけでなくアプリが計画されていることには、関心が寄せられていた。



### —衛星メーカーの動向

第2日の朝には衛星メーカーCEOが勢ぞろいするセッションも人気を集める。このセッションではパネリスト個々の冒頭プレゼンがなく、司会者の質問に答えるだけという趣向だ。

ここでも司会者は(製造能力過剰の業界では当然かもしれぬが)、Consolidation にしきりにこだわった。一番可能性が近いといわれる欧州の再編について、Alcatel の Soullisse 氏は、Astrium とは話していないが親会社レベルでフィンメカニカ社とは話していると 2 度も発言するなど、再編の可能性も匂わせた。米国では Chapter11 の SS/L の去就が注目されてはいるが、ここでは話は出なかった。

各社トップに今年何個の商用衛星発注があるかとの質問に対し、大勢は 15～20 個と昨年並みの数字を答え、LMCSS の Gavrilis 社長は控えめの数字を予測した。これに対し各社の受注数を尋ねられ、当然かもしれないが、合計数は発注数より多い 21～25 個となったようだ。日本の衛星メーカーの代表 MELCO の河内氏も堂々1 個と答えていた。

他に衛星の信頼性をどう高めるか、小型衛星への取り組み、新しいアプリケーション、HDTV、モバイル放送等に対し質問がされた。Alcatel 社 Soullisse 氏から、衛星ハードにばかりとらわれずブロードバンドソリューションに注力しているとの発言あり。これは他の衛星専門メーカーと違って総合 IT メーカーの Alcatel や MELCO のみが目指せる途であろうと思われた。その意味で、産業界がリーダーシップを取って官を動かし、測位・通信を組み合わせた一般ユーザむけ大型ソリューションである準天頂衛星システムの開発を推進しているわが国のメーカーの取り組みは、もっとアピールされ、注目されてよいのではないかと思われた。

### —アジア太平洋地域は…

アジア太平洋地域のオペレータは、ここ数年この会議ではさっぱり目立たなかったが、今年のセッションには AsiaSat の Jackson 社長や APSCC の Koh 会長といった有名人が登壇したこともあって、結構盛況だった。アジアは今年は ip-Star や日韓協力の MBSAT といった新サービスが始まるエキサイティングな年、それぞれアジアでの本格的な衛星ブロードバンド、モバイル放送の担い手としてもっと世界から注目されてよい。また、2008 年の北京オリンピックへ向けて、衛星が重要な役割を果たすようになるだろうとの前向きの見通しや、Optus-C1 や Koreasat-5 のように、Commercial と Military とのハイブリッドが目立つようになるだろうとの予測もなされた。

### —衛星ブロードバンド

最終日になるとセッションも午前中の二つだけとなり、参加者も激減して何となく寂しくなる。。衛星ブロードバンドについて、最初は地上ケーブル事業者中心のセッション。ここでは衛星ブロードバンドはどういうところに活路があるかとの問いに、米国の中で地上ブロードバンドが将来ともサービスされない地域が 2,300 万所帯もあり、産業では中小企業の 30% はサービス外、といった数字をあげて、潜在的な衛星ブロードバンド需要が示されはしたが、これ以外ではケーブル側からはクールな反応に終始した感じだった。

一方、後半の衛星オペレータのセッションでは、HNS など一部の社より、ブロードバンドは衛星なしには発展しないと強気の発言もあり、全般に期待が示されたが、前半のセッションでの地上側のクールさと間の隔絶は埋まらない感じであった。

ここでもやはりサービスのユビキタス性の要求と、「山の上では平地よりかなり値段が高くて、人は水を買う」説とのかねあいを分析し、そのギャップを埋めるのにどこまで技術開発が必要か、というアプローチが必要だったのではあるまいか。





### 一にぎやかな関連イベント

Satellite2004 にはいくつかの関連イベントがあり、会議に華やかさを添える。

まずは初日の夜恒例の SSPI (Society of Satellite Professionals International) の Gala。これはグランド・ハイアット・ホテルの大宴会場で行われる Black Tie パーティで、男性はタキシードに黒蝶タイ(普通のダークスーツの参加者も2割くらいか)、女性は100%イブニングドレスで、昼間は男性が大半の会議だけに、どこからこんなに美女達が沢山湧いてきたのかと思うほどだ。

テーブルは殆どメーカーやオペレータ等の企業によって買いきれ、お得意様を招待して座ってもらうビジネストークの場となる。このテーブル販売のあがりが SSPI の大きな収益源になっているらしい。

この晩餐会の直前に、別室で SSPI の年間の功績賞の表彰があり、Gala の場で一般参会者に発表される。昨年をご存知の通り JFSC の飯田会長が見事受賞された。

7時から始まって、8時頃までがカクテル、テーブルに移動して10時頃まで晩餐、そのあとカクテルの場所に戻ってアフターデイナードリンクとコーヒーと、延々11時過ぎまで続くので結構くたびれた。

二つ目の大きなイベントは第2日目昼、「Executive of the year2003」の表彰とスピーチが行われる昼食会である。かつては、メーカー、オペレータの大企業の CEO が順繰りに受賞するような傾向がないでもなかったが、今年では中堅のベンチャー企業 Viasat 社の CEO、Dankberg 氏が選ばれた。

受賞理由は軍用・民生、国内・海外、固定・モバイルの各面にわたってブロードバンド衛星通信のネットワークシステムの開発・受注に成功し、特にバンド幅の効率化利用と低コスト化に優れたものあり、とするもので、沈滞気味の大企業でなく、このような技術屋そのもののような若い経営者が選ばれるあたりは、さすがアメリカという感じである。



会議に並行して開催される Exhibition はきわめて大規模なもの。おそらく、衛星通信関連だけでこれだけの数の出展者を集めるのは他にないだろう。それでも、大手でボーイングがロケットも旧ヒューズの衛星も展示していなかったり、SS/L も時節柄お休み、欧州ではアストリウムがなかったりと、やはり少し寂しい。日本からは NEC 東芝スペースだけが出展して気を吐いていた。

### —所感

今回 Satellite2004 に参加して、帰りのワシントン・ダレス～成田への 13 時間以上の長い長い旅で、こんなことを考えていた。

#### ①アジア太平洋地域と日本は？

アジアが衛星商戦の目玉だった時代から比べると、いま世界の目がアジアへ向かないのはある程度やむを得ないにしても、日本のオペレータ、メーカは、国際ビジネスを一つの大きな要素として打ち出している以上、もっと自社と海外とのつながりをどうしようとするのか、発信する必要があるのではないか。

今回も登壇したのはオペレータ、メーカ各 1 社の 2 社のみ。たとえばアジア太平洋のオペレータのセッションに、世界番付 10 位までに 2 社も入る日本のオペレータの姿が見えないのは不自然である。日本が欧米の大手メーカ・オペレータのマーケットというだけの存在になっては情けない。

#### ②衛星通信は技術を基盤としたビジネス

大分減ったとはいいながら、「衛星通信はこれこれこんなにメリットがあるので、前途有望である」式の安易なセリフは今でも出てくる。

今収益を上げているのは、過去にしっかりした技術開発が行われ、便利さに加えて、技術開発によって可能となったコスト面でのメリットを備えることに成功したアプリケーションに限られているはずで、これは将来益々明確な傾向となろう。その意味で、世界のリーダ的な大手オペレータに、次の時代に稼ぐために今せねばならぬ技術開発が何なのか、という技術戦略がどの程度存在しているのか、やや気になる所であった。

わが AIAA-JFSC が 4 年に 1 回手がける ICSSC は、単に集まるペーパーを並べるというだけでなく、衛星通信ビジネスを発展させるための技術開発を大きく念頭において、これに関するペーパーを意識的・組織的に集め、世に問うという役割を持たせられぬか、と願うのは大それたことだろうか。 ■